
ロング・ロング・グッドバイ

中野 里美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロング・ロング・グッドバイ

【Nコード】

N8309S

【作者名】

中野 里美

【あらすじ】

やばい教師に目をつけられます。

高校に入学して、すぐにとんでもない教師に目を付けられたもんだと僕は思った。そいつは岸田という化学の教師で、長身でハンサムでいつも白衣を着ていて、白衣にはジョン・レノンがプリントされていたらうえ女子にモテて、僕に向ける視線がとて冷たかった。僕は岸田のヤバさに気がついてたんだ。でも、周りに「岸田ヤベーって絶対ヤベーって。犯罪者予備軍だよ、ってか犯罪者かもしれねえよ！　なんかたくらんでるよ！」って言っても相手にされないどころか非難される始末だった。

だいたい岸田の授業はおかしかった。なんで授業で爆弾の作り方教えるんだよ、そんなの教科書のどこにも書いてねえよ！　ってかエントロピーってなんだよ、熱力学がどうか、生物がエントロピーを消費していることに私は感動したって、だから教科書のどこにも書いてないじゃん！　そもそも、化学なのかそれは、危ない宗教とかじゃないのか、政治活動とか影でしてんじゃないのか、公務員だろ岸田マズイだろ！

それでも、岸田は長身でハンサムでなんかジョン・レノンのプリントしている白衣とか着ちゃってるから、みんな岸田先生万歳！　みたいな感じで、僕はいよいよ寒気がしていた。

でも一人、岸田先生万歳！　じゃない奴がいた。それは池田という肩で話しになんない奴だけど、音楽の趣味が合うから僕はそいつとつるむようになっていて、岸田万歳じゃないことでもいいよ友人はこいつしかいなくなっていた。

昼休みに飯を食いながら池田と話をした。

「絶対やばいって、あいつの目を見ただろ？　つつか今日、爆弾の作り方説明してただろ、あれまずいだろ絶対！」

池田は面倒くさそうに言った。

「ねみい」

「ねみい、じゃねえって！ だいたいおまえ、ジョン・レノンを白衣にプリントしてんだぞ。あれはジョン・レノンが好きだからプリントしてるんじゃないんだよ、いいか、ジョン・レノンってのはあいつにとってシンボルなんだよ、なんつうか、反社会性みたいな。ジョン・レノンなんて、ロックの象徴みたいなもんだろ、それにジョン・レノンっていったらチャプマンに撃ち殺されて、チャプマンって奴のポケットにはライ麦畑でつかまえてって小説が入ってて、ライ麦って言ったら青春の象徴で、学生運動やってたころの反社会性の象徴みたいなもんだつたらしいし。つまり、あれ、なんかわけわかんなくなつてた……」

「ごちゃごちゃうるせえよ。そんなに気になるならあいつに訊きやいいだろ」

池田はめずらしくまともなことを言った。

「でも、なにかたくらんでるんですか、って訊いて教えてくれるのかよ？」

「知るか」

とりあえず、僕は担任に岸田がどんな奴なのか訊いてみることにした。僕らの担任は山田ひろしといった四十五歳のバツイチで、入学した顔合わせの一発目で「私きのう風呂に入ってますんあつはっは」とか言つて、みんなをドン引きさせた大物教師だった。

でもひろしはけっこういい奴で、風呂に入らないのも微生物との共存が目的なのだった（ひろしは生物の教師だった）。そして口が軽かった。

僕は放課後、ひろしがよく仕事をさぼっている生物準備室に顔を出した。池田もついてきて部屋に入ると言った。

「う！ ヤニくせえ！ ウヴェヴェヴェ」

「おいおい、勝手に入ってくるな」

とひろしは言つて、ワンカップを隠した。

「先生なんでクビになんないの？」

「もうなりかけてんだよ。なんか用なのか？ あんまりここに来るんじゃないよ、お前らは頼むからさあ」

「岸田先生がどんな人なのか聞きたいんだけど。あの人、今日爆弾の作り方を授業で説明してたし、なんか、たまにわけわかんないと話すからさあ」

「化学の岸田先生か、俺はあんまり話したことないんだよ」

「は？ なんで？ 先生同士だし、科目も似てるじゃん」

「俺に訊くなよ」

ひろしは教師連中にも嫌われてるのか……。でもひろしは三日に一度しか風呂に入らないと言っているから仕方なかった。

「用がないならさっさと帰れ。俺は忙しいんだから」

僕はもう少し話したかったけど、池田が「俺もヤニ吸いたくなっちゃったよ行こうぜ」とか言うからしかたなく帰ることにした。

帰り、池田はひろしのセブンスターをパクってきていて、それを吸った。

僕の顔に煙を吹きかけると言った。

「まだ気にしてんのかよ。もし、あいつがなんかしてきたら俺がとちめてやるから安心しろって」

まあ池田がウザがるのもわかるっちゃわかる。とりあえずは、化学の授業しか岸田と会わないわけで、こちらが気にしなければ何もしてやることは無いのだ。よく考えたら僕はなんでこんなワアワア一人で騒いでいるのだ。ほっときやいいか、と僕は考えるようになった。

そんなふうを考えるようになった矢先、池田の糞野郎がまじでやらかしゃがった。

その日の化学の授業は、なぜかヨーグルト作りだった。聞いちゃいなかったけど、発酵させて変化をみるのが目的らしかった。僕はちきしょうまた岸田の人気稼ぎだと思った。だって、教科書にヨーグルトの作り方なんて載ってないんだよ！

それで僕と池田は二人でつるんで、みんながワイワイやっているのを眺めながら、牛乳の入った紙コップと割り箸を持って突っ立っていた。僕らは馬鹿で説明を聞いてなくて、だからと言って誰かに訊く気にもなれないし、なにをすればいいかさっぱりわからない状態で、ただポカンとして授業が終わるのを待っていたのだった。

どうしてそんなことをしたのか知らない。

池田が観察用の金魚を牛乳のなかに落とした。箸をつかって。

「なにしてんだよ！」

「いや、金魚もカルシウム足りないかと思ってよお」

「なわけねえだろ死ぬぞ！」

僕は金魚を掴んで水槽にもどした。

池田は大爆笑していた。こいつはこういったわけわかんない事がロククつぽいとか、不良つぽいとか思っているみたいだった。つか、ただの弱いもの苛めだ。でもそんなこと言つと池田はふて腐れて面倒だった。

金魚はもう全身から白い液体をしばらく出していたけど、とりあえず元気に泳いでいた。池田は「精子みてー！」とか言っていた。

で、僕が金魚を手でもどしているところを、タイミング悪く岸田に見られていた。金魚をもどしてから、やべえと思つて岸田を見ると、思いつきりこつちを見ていたのだ。その手は震えていた。

タイミングよくチャイムが鳴つて、僕は礼とか無視して、池田と化学室を出た。

僕は翌日の放課後、やっぱり金魚のことを謝ろうと思つて、化学室に行くことにした。池田は誘わなかった。

水槽の横に、菊が活けてあった。

おいおい。

しかし、やっぱりあの金魚は死んだのか。

先生は居ないようだった。でも、化学準備室が半開きになっていたから、そのなかに居るのかと思つてなかに入った。

ひろしの部屋と違ってとても片付いていた。机にはチェ・ゲバラの自伝があり、本棚には、毛沢東だのマオイズムだのカストロだの長征だのマルクスだの東條英機だの、とにかくそんな本がぎっしり詰まっっていて、化学の本はなかった。

僕は鳥肌が立った。

先に言っておくと、僕にとってチェ・ゲバラなんてファッションでしかなかった。古着屋なんかにいけばバンドTシャツやキャラものTシャツと並んでゲバラのTシャツがあるし、ファッション誌を開けばゲバラの顔をけっこう見かける。そんでこのカッコいいおっさんは誰ってことで本を買って読んだけど、キューバってどこ？ 社会主義ってなに？ そもそも革命って？ みたいな感じで、だいたいそんなこと辞書で調べてもよくわからないし、しかたないからマルクスを読んだり、歴史をすこし調べたりした。でもそもそもわからないことが多すぎて、先に進まなかった。ただゲバラが喘息ってところに共感して、ボリビアです巻きにされて死んで伝説になったところで僕はマジでかっこいいと思った。でもそれは、カート・コバーンやシド・ヴィシャスや尾崎豊と同じようなかっこよさで、それ以上でもそれ以下でもなかったんだ。だからそれらの思想が周りと違っただけはわかってはいたけど、影響なんてこれっぽちも受けていなくて、ビビりまくった。

とにかく、そんなこと考えてる場合じゃないよ。とっとなんかから逃げなくちゃヤバイ。岸田はやっぱリクレージーだ！ と思っただけだと白衣の岸田が立っただけで僕は「ぎゃあああ！」と声をあげた。岸田の目は冷たい。僕は言った。

「あの、勝手に入ってすみません」

岸田はうつむいて、椅子に腰掛けた。僕は一気に言った。

「金魚なんですけど、あれやったの池田です。池田が犯人です。僕は関係ありません。まったく。まじでこれっぽちも」

だから恨むなら池田を恨んでください。池田ならどうなってもいやと僕は思った。

岸田はキョトンとして僕を見た。

「なんだか、岸田の雰囲気が変わった。僕は調子に乗って続けた。

「あいつはまじ死んじまえばいいんすよ！ あんな屑生きていてもしかたないし、たぶん生きていても将来の職業ドロボウとかっすよ」
表情は変わってなかったけど、岸田の僕を見る目に少し温かみが出たきがした。

岸田はなにも言わなかった。この際だから訊いちまえと思って、話した。

「ゲバラとかマオとか、先生いいんすか、こんなの学校において。他の先生とかなんか言わないんすか？」

「どうしてそう思うの？」

岸田の声はとても小さかった。

「だって、なんかものものしいじゃないですか。思想っていうかそういうの」

「学校の図書室から借りてるから」

「はあ。ジョン・レノンが好きなんすか？ なんか思想みたいな意味があるんじゃないですかそれ？」

岸田は少し笑った。

僕はとにかく謝ったし、あれ、謝ってないか、でも言うことは言ったし、もうなにを言っていていいかわからなくて、失礼しますと言って部屋を出た。

翌日、岸田は失踪した。

そのことを僕はひろしから聞いた。数日間岸田が学校に現れなくて、岸田教徒どもは寂しいだのつまらないだの化学の授業でわめいていた。

僕はひろしの部屋に行つて「岸田先生どうしたの？」って訊いたら、誰にも話すなよって言って、ひろしは岸田の失踪を教えてくれた。精神病院にも通っていたらしかった。でも、それ以上はなにも知らないようだった。

で、付け足した。

「俺も失踪したいよまったく！ このあいだ、娘に包丁向けられてお父さんなんか死ねって言われたんだよ。まだ十四歳だぞ！ 俺はどうしたらいいんだ」

「へえ」

「社会人つてのはたいへんなんだよ！」

僕は机に広げてあつた裂きイカを食った。きっとひろしが失踪しても、誰も騒がないだろうと思っただけど黙っていた。

僕はひろしの部屋を出て、そのまま学校の図書室に向かい、岸田が読んでいた本を探した。チェ・ゲバラのモーターサイクル南米旅行記だった。なにか挟まっていた。四つ折にした大学ノートの切れ端だった。

そこには、金魚を殺そうとしている生徒を注意できなかった自分にたいする罵倒や、生徒が怖くてしかたないといったことが書かれていた。

岸田が、残したものにちがいがなかった。

岸田は僕が思っているような人間じゃなかったとそのとき知った。僕はそれをひろしに渡した。

ひろしはそれを学年主任に渡した。池田は職員室に呼ばれて、金魚の件とカバンからタバコが見つかったダブルパンチで停学となり、僕はざまあと思った。

学年主任に僕は訊いた。

「岸田先生つて本当はどうしたんですか？」

少し考えてから学年主任は教えてくれた。岸田先生は病気療養しているらしかった。それは鬱のようなものらしい。かれは真面目すぎるから、と付け足した。

山田先生は失踪したつて言つてたんですけど、と訊ねたら、失笑していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8309s/>

ロング・ロング・グッドバイ

2011年5月4日23時21分発行